

## 唐津街道 赤間宿

赤間宿は、唐津街道の宿場町です。唐津街道は、江戸時代（1603～1867年）、九州を通る主要交通路の1つでした。明治時代（1868～1912年）に福岡で鉄道が発達するまで、唐津街道は、佐賀県の唐津市と福岡県の北九州市を結ぶ主要路でした。赤間宿は、唐津街道に21ある宿場町の1つでした。赤間宿では、旅人が馬に水をやり、食事をし、その夜の宿を見つけることができました。赤間宿は、明治時代まで、宗像で一番小売店が集まっている場所でした。しかし、明治時代に福岡と北九州をつないだ新しい鉄道路線は、赤間宿を通りませんでした。

現在、赤間宿には唐津街道の昔の雰囲気を残した通りが500mほどあります。この通りには、19世紀に建てられた店舗や町屋が並んでいます。

宗像大社の神事に酒を提供している勝屋酒造など、いくつかの企業は、江戸時代から事業を続けています。勝屋酒造の建物の広い間口は、江戸時代の元々の建物を明治時代に増築したものです。酒を造るための水は、この地域に2つ残っている井戸の1つから汲み上げています。もう1つの井戸は、「街道の駅 赤馬館」にあります。

地元の言い伝えによると、この地域の名前は「赤馬」から来ています。日本の初代天皇だと信じられている神武天皇が、その軍勢と大和（現在の奈良）へ向かう途中にこの地域を通っていると、赤い馬に乗った神が現れ、神武天皇たちを無事に導いたそうです。「赤間」という地名の読みは、「赤馬」と同じです。宗像の八所宮は、神武天皇をその旅の間守った神を祀るよう、第40代天皇の天武天皇（631～686年）が要請して建立されたと言われています。